
 学 会 記 事

第45回新潟癌治療研究会

日 時 平成4年7月4日(土)
午後1時30分より6時まで
会 場 新潟東映ホテル
2階 朱鷺の間

I. 一般演題

1) 白血病に対する G-CSF 併用化学療法の検討

小山 覚 (済生会第二病院)
血液治療科

G-CSF は、好中球の増殖と機能を選択的に刺激するが、骨髄性白血病細胞をも刺激することが知られ、急性白血病に対する投与は慎重を要するとされている。一方、G-CSF を前投与することによって白血病細胞を細胞周期に導き化学療法の効果を増強する試みがある。今回、難反応性白血病に対し G-CSF 前投与 Ara-C 大量療法を施行した。またハイリスク白血病に対し G-CSF と Ara-C 少量の併用投与を試みた。その結果、① G-CSF と Ara-C の併用投与で極度に遷延する骨髄抑制は認められなかった。② G-CSF と Ara-C の併用投与中に白血病細胞が明かに増加した症例は認められなかった。③ G-CSF と Ara-C 少量の併用投与では、顆粒球増加と白血病細胞の減少が同時に観察される症例が認められた。等の成績が得られた。

【考察】G-CSF 併用化学療法は比較的安全で実用的であると考えられたが、抗腫瘍効果の増強・長期的成績などについてはさらに詳細な検討が必要である。

2) 口腔癌の下顎骨浸潤判定における骨シンチグラフィーの評価

土持	眞・小沢	一嘉
飯浜	剛・武田	幸彦
渋谷	善行・杉浦	正
尾崎	守男・成田	保之
堀川	恭勝・岡野	篤夫
森	和久・又賀	泉
土川	幸三・加藤	謙治

(日本歯科大学
新潟歯学部
第二口腔外科)

術前に口腔癌で下顎骨浸潤の有無を知ることが手術術式を決定する上で重要である。骨シンチグラフィーはX線写真よりも一般に sensitivity に優れていると考えら

れている。そこで、この画像診断法の顎骨浸潤判定における有用性について検討したので報告する。対象は口腔癌の29症例、うち男性24例、女性5例、平均年齢59.1才(+12.7才)、である。27例は扁平上皮癌で、腺様嚢胞癌2例である。部位のうちわけは歯肉12例、口腔底8例、頬粘膜6例、舌3例である。シンチグラムは Tc-99 m methylene diphosphonate (MDP) の 0.25 mCi/kg を静注し4時間後に頭部の正面、左右側面を撮像した。ガンマカメラは parallel-hole の LFOV (large field of camera) を使用した。24例では radioisotope uptake を定量化して検討した。system に interface された computer により、定量化は4時間後の 3×3 pixel の関心領域を下顎骨に設け、それらの集積比として表現した。骨シンチグラフィーの sensitivity は 88.9%、X線写真は 77.8% であった。specificity は相方とも 72.7% であった。患側部/対側健常部 uptake 比は下顎骨浸潤群で 2.1+1.0 (平均+1sd) と非浸潤群の 1.1+0.2 より高く、有意 (p<0.01) に上昇していた。以上の結果より骨シンチグラフィーが下顎骨への口腔癌浸潤の判定に有用であることが示唆された。

3) 舌扁平上皮癌の治療成績

新垣 晋・野村 務
小林 正治・鈴木 一郎 (新潟大学歯学部)
河野 正己・中島 民雄 (口腔外科第一教室)

舌扁平上皮癌53例についてはその治療成績、再発様式を検討した。進展度別にみるとT分類では T1 24例、T2 20例、T3 5例、T4 4例と T1、T2 で83%を占め、N分類では N0 40例、N1 12例、N2 1例、又 Stage 分類では Stage I 23例、Stage II 13例、Stage III 13例、Stage IV 4例であった。

原発巣に対する初回治療は外科療法が42例(79%)と大多数を占め、次いで外科・放射線併用療法7例、放射線療法4例であった。又、頸部廓清術は34例に行われていた。

5年生存率(Kaplan-Meier法)はT別では T1 90%、T2 65%、T3 34%、T4 0%、Stage 別では Stage I 95%、Stage II 76%、Stage III 35%、Stage IV 0%であった。

再発は53例中16例(30%)に認められ、原発巣7例、頸部8例(後発転移3例を含む)、遠隔転移1例であり、再発腫瘍の制御は2例(頸部転移)のみ可能であった。